Title	アパッチたちは万延元年の一揆を夢見るのか?: アニメ『アパッチ野球軍』といくつかの文学作品について
Sub Title	Do the baseball boys dream of a revolution?
Author	許, 光俊(Huh, Kwang Joon)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2014
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.135 (2014. 3) ,p.163- 184
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	エッセイ
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000135-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エッセイ

アパッチたちは万延元年の一揆を夢見るのか？ ——アニメ『アパッチ野球軍』といくつかの文学作品について——

許 光 俊

1

言葉とは、どんどん新しいものが生まれる代わりにどんどん消え去っていくものであり、いささか乱暴かもしれないが、例をあげれば日本語と呼ばれる言語は、固定化した形式ないし状態というよりも、一種の理念もしくは理念めいたものを無意識に志向する集団的な一精神状態と考えたほうがよいのかもしれない。すなわち、言語のひとつの大きな特徴とは鉱物のような固定性の中ではなく、流動性や変化にあるということである。

日本語においてどんどん消え去った言葉の中には（消え去ったというよりも消し去られたというほうが正確かどうかはともかくとして）、たとえば差別的な意味合いを持つ多数の単語が含まれている。ただし、本質的に言語の重要な機能とは文節化すなわち区別することであるからには、おのずと差別的なニュアンス、そこまで強く言わないまでも上下の価値判断を内包せざるを得ないことはほとんど必然的であろう。

あるいは、アルベール・カミュの小説『異邦人』のように、そこにいる人間はただ「アラブ人」というごくおおざっぱな集合的な名称で呼ばれるだけで個々の名前を与えられていない、そのような形で差別的な視線が表されてしまうというあり方も考えられる。そこでは言葉が細やかに使われないことによって差別が表象されるという、逆説的な表現が成り立ってしまう。言語表現は、それを口にする者、記す者の意図や意識とは別のところで、思いがけない意味

を持ち得てしまう。それは場合によっては、何十年か何百年かののち、ある解釈者によって発見されればかもしれないが。

差別的な意味合いを含んだ単語を、現代の良識ある人間ならどこまで使用してよいか、あるいは具体的にどの語は使用可能で、どの語は使用を避けるべきかは容易には定めがたい（今、私は「良識」という語を用いたが、この語が大いに政治的である可能性、すなわちまっすぐに差別や権力を体現してしまう可能性は煩瑣になるのでここでは問わないにしても）。言葉は、歴史や場所によって少なからず意味を変化させるものであり、またそれが発せられる状況によってもニュアンスを変えてしまうからである。ただ、昨今の日本においては少なからぬ人々が、差別語は基本的には用いるべきではないが、同時に、過剰な制限も好ましいものではないと見なしているようである。

差別語が使用されるべきではないという最大の理由は、差別はすべきではないという点にある。従って、差別語を用いないということは、自分は人を差別しようとはしていないという態度の表明であり、より具体的には個人や集団を出自や職業などで否定的に価値判断する意図はないと表明することである。

そのような立場を受け入れるであろう、あるいは受け入れるべきだと考えるであろう今日大多数の人々にとって、1970年代初頭に制作されたテレビアニメ作品『アパッチ野球軍』ないしそれに先行する原作漫画は、あまりにも屈託なく差別語、ひいてはそれを生み出す差別の心理を描いている点で驚くしかないものであろう。なるほど制作されたのが現代に比べればはるかに差別語が日常的に用いられた時代ではあったとしてもである（そうした言葉は後世において差別語であると名指しされることによって差別語となったわけではあるけれど、しかし名指しされないうちから、差別と考えられるべき心理がその背景にあったことは否定しにくからう）。

というよりも、『アパッチ野球軍』とは、差別の心理によって成立した物語と呼ばれてよい。この言い方が抽象的すぎるなら、差別によってドラマが紡がれる作品であると言い換えてもよい。ここでは物語の枝葉末節として差別の現象がもろもろ見られるというのではなく、差別抜きでは物語が存在し得ないものである。もう一度確認するなら、差別とは人の価値を出自や職業などで計るこ

とである。ところが『アパッチ野球軍』においては、まさにこの出自や職業、ことに現代において「良識」ある者なら忌避する、ある者をその者自身ではどうしても解決できない条件や要素によって判断することがさかに行われている。別の言い方をすれば、この作品において登場人物は、環境や状況と切り離せないように造型されている。ある若い男はある若い男なのではなく、前科者の息子だったり、村長の息子であることが本質をなす（ということはつまり、ある人間の性質なり本質なりを部分的であれ環境に還元するということは、必然的に差別の根拠を導き入れることになる人間観ということになるのではないかと思うが）。もし『アパッチ野球軍』を一種の実存主義的な物語ととらえたいのなら、それは登場人物たちが状況を乗り越えていくという設定やプロットに求めることが可能だろう。

2

けれども、今ここではまず『アパッチ野球軍』がいかなる物語であるかを記しておく必要がある。原作漫画は1970年から72年にかけて「週刊少年キング」で連載されている。原作者は花登筐、画を担当したのは梅本さちおである（不明確な言い方だという気もするので念のため補足すると、単行本には「作」が花登で、「画」が梅本と記載されている）。単行本化もなされているが、ややこしいことに連載分のすべてがそこに含まれたわけではなく、試合の途中で唐突に中断している。それに続くべき内容は簡単に文章で説明してある（どうしてこんな奇妙な事態が起きたのかは好事家の興味をひく問題だろうが、私が論じたいのはそのことではないので、ここではこれ以上記さない）。

雑誌連載をもとにしたアニメは1971年10月から72年3月にかけてNETの系列局で放送されている。これもまたややこしいのは、漫画とアニメにはさまざまな違いがあり、登場人物の姿形はむしろのこと、省略されたエピソードも少なくない。逆に追加されたエピソードもかなりの数になる。が、本稿においてその異同は重要な問題とはならない。私がここで取り上げたいのは、より多くの人々の目に触れたであろうアニメ作品である。というのも、端的に言っ

てアニメ版は原作以上にディテールにふくらみがあり、より充実していると思われるからである。そして、詳細は後述することになるが、村一番の金持ちで権勢欲も強い「よろづ屋」の経営者が、子供たちの野球チームと対立する様子が、いっそうドラマの前景にせり出ている興味深いからである。アニメ版では、野球の試合以上に、醜い大人たちと、理想主義的なアパッチ野球軍の衝突を描くことに力点が置かれているのは明白である。それが、大人も含めてより多くの人々の目に触れるテレビという媒体を意識しての改変かどうかはわからないが、結果的により刺激的な作品になっているのは疑いない。

アニメ版のクレジットには、台本担当として花登の他に、梅谷卓司の名前も表示されている。彼が台本執筆にあたっていかなる役割を果たしたのかはわからない。しかし、私は作家論をしたいわけではないので、それはどうでもよいことである。花登筐（1928-83）は関西生まれで、生涯の間に莫大な数の小説、脚本、エッセイなどを発表した。私はここで彼についての論を展開したいわけではないので、これ以上のことは記さない。

梅本さちお（1943-93）は、スポーツ漫画を多く描いたようである。後述するように『アパッチ野球軍』はもっぱら四国で展開される物語であるから、彼が登用されたのは、そこにも登場する高知の出身であるからかもしれない。しかし、彼についても私は特に何かを語りたくないわけではない。また、これは漫画のアニメ化に際してよくあることだが、セル画を描く者が異なれば、絵が若干表情を変える。また、作画監督は数人が分担しており、回ごとに若干絵の調子が変わってくるのも、アニメではしばしばあることである。

初回「傷だらけのエース」は、夜の海を進む旅客船のシーンで開始される。甲板を歩いている女学生たちは、ひとり寂しく海を見つめている青年を見つける。彼女たちは荷物に記された名前を見て、彼がかつて世を沸かせた甲子園の名投手、堂島剛だと気づく。

5年前、堂島は甲子園で史上初めて完全試合をなしとげ、日本中を熱狂させた。だが、この快挙は彼の人生にとっては仇となるものだった。プロ球団のスカウトたちが堂島の貧しい家に殺到し、彼らがちらつかせる契約金の額を見て、父親がすっかり理性を失ってしまったのだ。それは普通なら父親や堂島が

「一生かかってもつかめんような」額だった。

堂島の家は貧しく、長屋暮らしをしている。父親は前科者である。彼は出所後、早く死んだ妻に詫びるように、真人間となって働いていた。ところが、スカウトたちが提示する金額に誘惑され、再び自堕落な人生に戻る危険が生じたのである。

酒を浴びるように飲み、少しでも契約金を吊り上げようとスカウトと交渉する父親の醜悪な姿を目の当たりにした堂島は、彼らの前で自らの左手を深く傷つけ、選手生命を絶ってしまう。金の魔力に狂いかけた父親は、この凄惨な自己犠牲によって再び正気に立ち返る（なお堂島はこの事故に先立ち、アルバイト中の事故により利き腕の右手に重い傷を負っている。そのため、彼は左投げ投手に転じたのである。その大事な左手をわざと傷つけることによって、彼は野球を完全に諦めたのである）。

堂島は地道に工場で働き始める。しかしながら、早くも2年後、父親は死んでしまう。堂島が黄金の左手を失ってまで守ろうとした、父や妹との正しく平和な生活は、期待に反してあっという間に終わってしまったのだ。

やがて堂島の妹は、彼と同じ工場で働く「まじめな」工員と結婚した。ふたりは「貧しい」が「幸せ」だった。

妹の新生活の門出を祝ったあと、ひとりぼっちになった堂島は、生きていく目的もなく、虚脱状態に陥っている。そんな彼にもう一度野球をやってはどうかと勧めたのが、高校時代の恩師、ネギ監督だった。戦争で片手を失い、選手生命を絶たれたネギ監督には、彼の気持ちがよくわかったのである。しかし、両手とも機能が完全ではない堂島は、もはやピッチャーにはなれないので、ネギ監督の勧めに従い、山奥の高校の野球監督となるべく、四国の松山に渡ることにしたのである。

よく事情もわからぬまま彼の地に旅立った堂島は、船で四国に渡ったのはいいが、最初から途方に暮れる。その学校は奥道後から20里も山奥に入った「猪猿村」にある。堂島が港でそこへの行き方を尋ねると、距離も遠いが、何しろ恐ろしいところだから行くなと止められるほどである。

その彼を貧しげな馬車で迎えにきていたのが、豪放な雰囲気漂わす老人

だった。堂島が目指す学校の校長、岩城^{がんじょう}である。彼は道後温泉を通り抜けながら、ひとりで船に乗って教えに来た堂島は「まるで漱石先生の『坊っちゃん』だな、ガハハハ」と笑う。

実は、堂島が向かっていたのは、正式の高校ではなく、私塾だった。分教場を卒業した子供たちは、遠い町の高校へは通えないし、経済的にも余裕がない。だから、岩城は分教場を卒業した子供たちのために塾を開いていたのである。そんな話を初めて聞いた堂島は、自分がネギ監督に騙されたのではないかと疑い始める。

猪猿村への道は想像以上に長く険しい。崖沿いの道に差し掛かったところで、堂島はひとりの女が男たちに襲われているのを目撃し、とっさに石を投げて男たちを撃退する。

なんと、その女は岩城の孫で塾の教師をしている千恵子、男たちは塾の生徒だった。岩城はほとんど犯罪を犯す寸前だった生徒たちをかばう様子を見せる。「若さがありあまってるのう。じゃから野球でも教えんといかんのじゃ」堂島はあっけにとられ、「これはたいへんなところへ来たぞ。まるでアパッチ村だ」とつぶやく。

ようやくたどり着いた猪猿村は想像を超えた陰惨な村だった。子供たちだけでなく、大人たちも暴力的で野蛮だ。少し前まで村ではダム工事が行われていた。しかし、あまり多くの人間が死ぬので今は一時中止になっている。遊ぶところもない山奥なので、労働者たちは毎晩酒を飲み過ぎたあげく、喧嘩をしたり、病気になって死ぬのである。

校舎は惨憺たるもので、グラウンドすらない。それどころか、グラブやバットのような基本的な道具すらない。再び呆れた堂島がここは「アパッチ村」と正直な感想を言うと、千恵子は否定しない。しかし、彼女は楽観的である。彼女が10年前に高松から来たときには「類人猿みたいだった」生徒たちは、今では「どうにかアパッチなみになったんですもの。おじいちゃんを今度は人間なみに改造しようとしていますの」というわけである。そのための有効な手段と岩城が考えたのがスポーツであり、堂島が招かれたのはそれが理由だった。

先ほど堂島の投げる石で撃退された生徒たちは、復讐のために堂島の部屋にヘビを投げ込む。生徒のひとりにはきわめて気が荒く、ダムで働くダイナマイト担当者の息子ということで〈ハッパ〉と呼ばれている。もうひとりには剛健な身体に恵まれた大男で、木こりの家庭出身であることから、〈材木〉と呼ばれている。

この初回放送分で、状況はまず十分に説明されているだろう。かつての甲子園の名投手は、野球という生き甲斐を奪われ、妹が結婚したためひとりぼっちになり、これからどんな人生を過ごしていけばいいのか、途方に暮れている。状況もよくわからぬままに出向いた山奥の村は、決して楽園ではない。そこには洗練された都市ではもはや見られないような、むきだしの貧しさ、暴力、悪意、欲望がいまだ溢れている。堂島は、まずこの異常な状況を生き延びることを考えねばならなくなった。生き延びる、とはすなわち、「アバッチ」なみの生徒たちを文明化、社会化することにほかならない。そして、まさしくこれが、岩城校長が堂島を招いた理由でもあった。

3

第2回放送「他国者（よそもの）を刺せ」において、残りの生徒たちが紹介される。彼らは、よそ者が村へ来たことを知り、暴力で彼を歓迎しようとするのである。すなわち生徒たちは、まずはひとりひとりが持つ暴力の性質によって特徴づけられている。彼らの本質は暴力にある。

ただし、その彼らが暴力を止める瞬間がある。食事時である。貧しい村では、食事以上に大事なことはない。それは岩城に言わせれば、「ヴェトナムだってあんた、クリスマスや正月には戦争を休むじゃろうて」ということである。

中には肉体的な暴力を行使しない生徒もいる。かといって、彼らが暴力と無縁というわけでもない。寺の息子である〈大学〉は、唯一高校生らしい服装をした生徒である。村では例外的に敬意を払われる僧侶の父を持つため、彼は周囲を見下している。頭の中は、大学受験に合格することによっていっばいだ。

ダム技師の娘、真理は、父親の仕事のせいでこんな村で暮らさねばならないことを呪っている。「わたくしのパパはダムの技師長ですの。東大出よ」彼女は本当は「原宿や六本木」で遊んでいたいのだ。おじぎの様子にしても村人とは違う。真理や〈大学〉は他の村人や山の者やダムの人夫たちに露骨に差別的な態度を取り、肉体ではなく言葉で暴力をふるう。

本名は小森、〈コウモリ〉と渾名される生徒は、父親が村で唯一の「よろづ屋」を経営しているために、一番の金持ちである。彼は腕っ節には自信がないので、金や物や悪知恵によって他人を支配しようとする。他の者の暴力が劣悪な生活環境や不幸ゆえのものと同情の余地があるのに対し、〈コウモリ〉は徹底して卑しく描写されている。それは、彼が少年のくせに父親の姿を見て、大人の醜さを模倣しているからである。

もっとも明朗そうに見える女子生徒の花子は、村長の娘である。が、彼女にしたところで、本質的に他の生徒と異なるわけではない。彼女は、村で一番の権力者の娘という立場ゆえ、他の者を見下している。村長の父親がそうするように、命令したがる。また、他の生徒たちは彼女を「お嬢さん」と呼ぶ。親の人間関係は、子供にも及ぶ。彼女の父に言わせれば、ダム工事関係者は「流れ者」であり、ろくでもない犯罪者ばかりである。彼女はこの偏見を共有する。父親は、特に人格者ということもなく、体面を守り、次の選挙でも当選することしか考えていない。

〈モンキー〉は猿のような外見で、またそのような奇声を発する。〈大根〉は太った女子生徒で、知能の発育に問題が見られ、他の子供たちから馬鹿にされている。〈オケラ〉はその名の通り、特に貧しい家庭出身で、食べ物にも事欠く。〈ダニ〉は近づくと痒くなるので、そう呼ばれている。

〈材木〉は体力には恵まれているが、知力には乏しい。彼には、他の人々に隠している秘密がある。母親が狂気に陥っているのである。ある日、父親がおそらくは山の中の事故で行方不明になったときのショックで、精神状態に異常を来したのである。これは原作漫画にはない、アニメだけのエピソードだが、当時の映画や漫画に見られる一般的な狂気の描写に従い、〈材木〉の母は、意味もなくヒヒヒと笑い続けている。

こうした生徒たちの中でひととき重要なのは〈網走〉である。ダムで働く彼の父親は、やくざを殺して網走刑務所に服役したことがある。やくざにピストルで撃たれ、片目を失いつつもナイフで返り討ちにしたことを彼はいまだに誇りにしている。人を殺したことの罪悪感など微塵もないのである。〈網走〉はその父の気性を受け継いで暴力的であり、常にナイフを携行している。そのナイフ投げの腕前は凄まじく、堂島はすぐれたピッチャーの資質を見て取る。

〈網走〉は、信じられるのは力だけだと繰り返す。彼に限らず生徒たちは、みなこのような価値観を共有している。その力とは、必ずしも腕力だけではない。学力であったり、親の権力であったりもする。いずれにしても、彼らが頼みにしているのは自分の力のみである。

ひとことでまとめるなら、『アパッチ野球軍』は、自分の力のみを信奉し、ルールや集団を無視し、ただ自分だけが栄えることを願う若者たちが、社会化されていく物語である。やがてナイフという暴力性そのものである凶器を文明的なボールへ持ち替えることで、〈網走〉の生命力は高次のものへと昇華されることになるだろう。野球のボールとは、文明の象徴に他ならない。

4

生徒たちの呼称には注目すべき点がある。その大半は、〈網走〉〈ハッパ〉〈材木〉〈オケラ〉のように親の職業や特徴から由来するのである。あるいは、〈モンキー〉〈大根〉のように、身体的な特徴から由来する。どちらにしても否定的な色合いを帯びている。つまり、この作品において渾名とは、呼ぶ者が呼ばれるものを蔑みの視線で眺めていることの表れに他ならない。そして、おのおのの生徒たちの間では、この蔑みの視線が交差してさながらクモの巣状になっている。

本来の名前そのまま呼ばれる例外はわずかにとどまる。村長の娘の花子と、ダム技師の娘、真理である。このふたりは村とダム関係者の頂点に立つ人物の娘である。端的に言って、もっとも権力を持つ者だけが、正しく名前と呼ばれており、蔑みの渾名を与えられないですむわけだ。

子供たちの大半は親の影響を強く受けている。『アパッチ野球軍』は、少年たちの物語であると同時に、その少年たちの背後にいる大人たちの物語、とりわけ衝突の物語である。というのも、大人たちは偏見に凝り固まり、子供同様に悪意をむき出しにしており、金や権力を盲信しているからである。

子供たちの衝突は個人的な喧嘩であることもあるが、しばしば社会的な意味を帯びている。すなわち、生徒たちは三つのグループに分けられる。(1) 昔から村に住む者たち。(2) ダム工事のためにやってきた者たち。(3) どちらにも属さない、山に住む者たち。

この3つのグループは互いに軽蔑と敵意を隠さない。もともとの村の住民、すなわち定住者にとって、移動を繰り返すダム関係者は得体が知れぬよ者であり、トラブルのもとである。ダム関係者はそのような目で見られて愉快なわけがなく、敵意には敵意で返す。また、いろいろな土地を知っているダム関係者にとって、村人はここ以外何も知らない田舎者である。「山の者」たちは、木こりなどを生業とし、山で暮らしていて、決して村に溶け込もうとしないし、また村も彼らを拒んでいる。彼らが民俗学で言う山の民であるのかどうかは完全には明らかではないが、そのようなふしはある。この場合、村という行政単位は、地域の実情とは無関係に政府や法律によって定められた、形式的な枠組みでしかない。

こうした対立に加え、村人たち、ダム関係者、それぞれの中に明確な階層差が存在する。作品中何度も民主主義という言葉が現れるが、実際には村では村長や「よろづ屋」を頂点とする前近代的な上下関係が維持されている。村長は、「税金を負けてやる」と言って敵を懐柔したり、選挙の買収も公然と行う。その傍若無人ぶりはまるで王様のように、実際村人たちは「村長さま」と呼んで恐れている。そして、村長は、馬車だったり、車だったり、駐在所の警官ですら自転車しか与えられていないような山奥の人々にとって羨望の的となるような移動の手段を持つ特権的な人間である（それもあって村人たちはトラックを何台も持つダム関係者を憎むのである）。

他方、ダム関係者においては、技師長のようなインテリと、荒っぽい人夫の対立が見受けられる。特に、ダム工事が中断しているために、両者の間には乗

り越えがたい溝がある。

岩城校長の塾とは、こういうまったく別々の生活様式を持ち、異なった環境で生きる人間が同じ場所に集まるということである。また、彼が教育的な手段として導入しようとする野球とは、このような者たちがともにすることができる何かである。野球の中で、貧富や身分・立場の差は問題とされていない。それは完全に平等な空間である。しばしば親から由来する負のニュアンスの渾名を持つ生徒であっても、親を乗り越えることができる。言い換えれば、野球とは、民主主義や平等が理想的に実現されたユートピアということになる。

またこの子供たちの野球の場において、直接自分が競技に参加しない親たちも、応援を通じて互いのつながりを感じることができる。野球は衝突を繰り返していた村民とダム関係者と山で暮らす者たちを融和させる。その意味で、野球とは身体的な活動や競技にとどまらず、好ましい心理的な効果を持つのである。

5

堂島が最初に猪猿村や生徒たちを見て、「アパッチ」という言葉を思い浮かべたときの「アパッチ」とは、早い話が野蛮人ということである。それは、文明化された者がされていない者を見下す言葉であり、一方的な断罪や排除である。

この「アパッチ」という言葉が、第14話「新チーム誕生」において否定的なものから肯定的なものへと意味を転倒させる、その際の原作者の手際は見事と言うほかない。

花子の父親を選挙で破って新村長となった「よろづ屋」は、堂島や岩城校長が彼の言うなりにならないことに業を煮やし、村議会の決定を経て塾の野球チームを解散させることにする。金の次には権力を求めてついにこれを手中にした「よろづ屋」は、立場を利用して、堂島やアパッチ野球軍を誹謗中傷し、村人をけしかけ、ありとあらゆる汚い手段でチームを消し去ろうとするのだ。その代わりに、自分の息子をリーダーに据えた新チームを作るつもりなので

ある。アニメ版『アパッチ野球軍』はこれ以後、生徒たちと村長のほとんど政治的とも言ってよいような戦いの様相を呈する。

堂島や生徒たちが、新村長の横暴な仕打ちに黙っているはずがない。彼らは従順にチームを解散する形を取りながら、今度は生徒たちの自主的な集まりとしてチームを再結成する。その新しいチームは「アパッチ野球軍」と名付けられ、アパッチ族の横顔を旗に取り入れることになるのである。

花子によって提案された「アパッチ」とは「西部劇に出てくるアメリカ土人の一種」であるが、「よろづ屋」=新村長はいわばその「アパッチを殺そうとするわけがわからん將軍」である。〈大学〉が補足する。「権力に刃向かうアパッチは、裸足で抵抗するんだ」完全に否定的な意味合いで物語の冒頭から何度も繰り返されてきた「アパッチ」は、この瞬間、悪に抵抗する者たちの誇り高い輝かしい呼称へと転換される。

この名前がいたく気に入った生徒たちは狂喜乱舞する。彼らは、弾圧されるアパッチ族に自分たちの似姿を発見し、またアパッチという語が彼らのあり方を明確に規定したのである。この、本質が言葉を呼び出し、言葉が本質を規定するという関係は、生徒たちの渾名の付け方にも共通する原理である。

6

『アパッチ野球軍』が、野球漫画の体裁を取るにもかかわらず、試合のシーンには通り一遍のおもしろさしかないというのは、この作品の特異性を明らかにしている。いかにも野球漫画らしいアクロバティックなシーンがないわけではないにしても、基本的にはこの作品は野球の技術や技について無関心である。言い換えれば、これは生徒がする野球を描いた漫画ではなく、野球をする生徒を描く漫画である。

アニメの最後の複数回は、アパッチ野球軍の強さを新聞報道で知って試合を申し込んできた名門 QL 学園との死闘が描かれている。と同時に、アパッチ野球軍の活躍という思いがけぬ特ダネを得て軽薄な報道に走るマスコミと、それに踊らされる滑稽な大人たちを描く。金と権力の亡者である「よろづ屋」=村

長の次に生徒たちの前に現れるのは、同じ種類の、だがより強大でたちが悪い敵である。

それは、端的に言って社会である。この敵は、「よろづ屋」のようにあからさまに妨害してくるのではない。そうではなく、味方のふりをして近づいてくるのである。たとえば、彼らは野球道具を寄付し、札びらを切って〈モンキー〉などを引き抜こうとする。それは、アパッチ野球軍が、自ら望まないにもかかわらず、強くなったことで必然的に呼び込んでしまった災いである。人々は、山奥からきた異形の子供たちに大きな商品価値を認め、それを社会システムの中に回収しようとするのだ。

結果的には、アパッチたちは甲子園で何度も優勝した強豪校に勝ってしまう。当然のことながら、マスコミは熱狂し、人々はアパッチ野球軍が甲子園に出場することを大いに期待するようになる。が、最終回放送において結末は意外なものに転じる。アパッチ野球軍は、正式の高校ではなく私塾のチームであるがゆえに、甲子園には出場できないという判断が愛媛県高校野球連盟によって下されるのだ。

この判断自体は特に奇妙なものではなく、むしろ常識的であろう。とはいえ、「これはルールなのです」と堂島を突っぱねる連盟関係者の言葉に残酷な響きがあることも否定できない。この場合のルールとは、複数の者が相談して決めたものではなく、連盟が一方向的に押しつけるものである。言い換えれば強い者が弱い者に強制するものである。「あなたもスポーツマンならルールを無視するわけにはいかんでしょ」という連盟の言い分には、ルールは誰にとっても公平だという思い込みを逆手にとった邪悪さがある。実際はルールは公平ではなく、強い者に奉仕しているだけなのである。

驚くべきは、制作者たちがこの障害を乗り越えるアイデアを何ら示そうとはしないことである。すなわち、ここまで物語は一応は野球をめぐる展開してきたわけだが、その最後になってその肝心の野球が投げ捨てられてしまうのである。

理想は現実の前には無力だったのだ、そう堂島は痛感し、敗北感に打ちのめされる。「理想だけでは生きていけない世の中の厳しさ」を思い知る。現実と

はアパッチ野球軍を妨害しようとした「よろづ屋」や村人たちだけではない。彼らは「現実」のちっぽけな切れ端にすぎない。野球界やマスコミといったより大きな現実の前で堂島はなすすべを知らない。その一方で、彼はこの村で自分がなすべき仕事は終わったとも考える。確かに、生徒たちは十分に文明化・社会化された。校長が彼に期待した通りになった。衝突を繰り返していた大人たちも、本質において改良されたわけではないにしても、何とか共存できるようになったようである。堂島は村を去ることを決心する。

むろん、堂島から村を去ると聞かされた千恵子の衝撃は大きい。その彼女に堂島は新たな夢を語る。もともと猪猿村がそうであったように、「北海道の山奥か太平洋の離れ小島」にはまだ野球を知らない子供たちがいるはずだ。彼らに野球を教えることを生涯の仕事としたいと彼は言うのである。だが、この生き方はどうなのだろうか。「理想だけでは生きていけない世の中の厳しさ」を知った堂島は、その「世の中の厳しさ」とこれ以上まみえることを嫌い、「理想だけ」を追う道を選んだようである。それは彼を辺境に押しやり続け、永遠の敗者にしてしまう道であり、結局はどこか煮え切らない不満の種ともなるのではないか。事故により、あるいは自らにより負った手の傷が彼の投手生命を奪ったように、不幸へと通じかねない決断なのではないか。何しろ、彼は何より野球自体を愛する人間なのだから。

これ以上やる気を失い、連盟と戦うつもりなど毛頭ない堂島とは反対に、村の人々は野球連盟の判断を知り、激怒する。今やアパッチ野球軍の熱心な応援者となった彼らは、「これは人権蹂躪、憲法違反じゃ」と声を荒げ、「文部大臣に直訴するんじゃ」と意気込む。しかし堂島は、興奮した人々とは対照的に、すっかりあきらめ顔である。一方、生徒たちは生徒たちで怒り心頭に発し、「連盟に殴り込みをかけて、四の五の抜かすやつをぶっ殺してやる」と気炎を上げる。彼らは、自分たちが強すぎて、町の間人が怖がっているのだろうと推測しているのである。ここで明らかになるように、村人や生徒たちがいささかなりともましになったのは、ただ野球の中においてだけである。逆に言えば、現実的な利害関係を切り離すことができる野球の中であら、彼らはいくぶんかまともになれるのである。

堂島は生徒たちの怒りをまともに受け取ろうとはしない。アパッチ野球軍の連中に対して放たれる言葉はいささか不思議である。「君たちはもうアパッチなんかじゃない。立派なスポーツマンなのだ。いや、立派な良識ある人間なんだぞ」と諭す。ここでは再びアパッチという語は、物語の冒頭と同じく否定的な意味を帯びている。

そして、驚くべき価値の転倒を言い出す。「ひとりひとりじゃ勝つことはできないけれども、みんなが力を合わせれば何物にも負けないことを知ったはずだ」だから、「たとえ甲子園に出られなくても、優勝したのと同じなんだ」というのである。この思いがけない言葉に、生徒たちは啞然としつつ、うなずく。が、おそらくこの言葉に、堂島自身が納得していない。帰り道をたどる彼はうつむいたままである。

このアクロバティックな論理には、危うさ、あるいは欺瞞が伴っている。堂島は、欲望のまま、自分の力のままに行動する生徒たちを、より社会的になるように教化した。それは、生徒の立場からするならば、外部の、あるいは他者の視点をみずからのうちに内在化するということである。その他者の視点とは、端的に言って野球のルールであり、「甲子園」である。甲子園出場の権利がないと拒まれることは、しかしそれもまた他者の視点であることによって、出場することと本質的には変わらない。が、その水準で話は進められず、堂島は奇妙な論理のすりかえを行っているのである。純朴な若者たちは、この堂島の言葉に涙を流しながらうなずくが、彼らは欺かれている。この瞬間、生徒たちは、教師の言葉をそのまま内在化させるという、完璧な教化が実現したのではある。しかし同情的に言うのなら、誰よりも堂島自身がそのような欺瞞を必要としていたのである。

アパッチ野球軍がいくら強くても、彼らは永遠に、おそらく「アパッチ」である限り永遠に高校野球や甲子園からは排除されている。彼らがある程度の経済的な豊かさを得、正式の高校に進学しない限り、甲子園への扉は決して開かれない。そして、そのためには、彼らは残念ながら、拝金主義と俗悪の権化たる「よろづ屋」的な価値観の中に入って行くほかあるまい。その意味において、アパッチ野球軍の勝利とは、皮肉なことに同時に彼らの敗北を引き寄せて

しまっている。

終景では瀬戸内海を渡る船に乗り込む堂島を生徒たちが見送りに来る。岩城校長は、「君の在任中、わしは何もしてやることができなかった。じゃからその土産をひとつ持って行ってもらいたいじゃ…荷物になるかもしれないが、これを持っていてくれんか」と千恵子を堂島のほうへ押し出す。突然のことで千恵子も堂島も驚くが、もともと好感を抱き合っているどうしであり、異存があるはずもない。ふたりが乗った船が遠ざかっていくのを、生徒たちは泣きながら見送る。堂島と千恵子の愛が、そして堂島との別れを心から悲しむ生徒たちの姿が救いであるとはいえ、強い苦みが残るエンディングである。

『アパッチ野球軍』とは、結局のところ、野蛮な子供たちが社会化されることによって、必然的に社会の負の側面から逃れることができなくなるという悲観的な物語である。善とは、あるいは善の幻影とは、社会化される途上において理想としてしか存在しない。社会化が完成されたとき、野蛮な子供たちは別種の野蛮、すなわち社会の野蛮に引き渡されるのである。そして、堂島はこの新たな野蛮に到達することを避け続けるために、猪猿村を捨てて、新たな未開の土地を探ることになるのだが、そこで彼は本当の満足を見出すことができるのかは、残念ながら疑わしいと言わざるを得まい。

さらに、物語の前史を思い起こすなら、猪猿村で起きたことは、かつて堂島の人生で起きたことの正確な繰り返しではないのか。彼もまた、その能力ゆえにかえって醜い社会との対決を強いられたのではなかったか。とするなら、堂島の行くところ、常に同種の不幸が再生産されるだけではないのか。そのように想像できてしまうのは、まことにやるせないことではある。もしも堂島の姿の中にどこかしらギリシア悲劇にも似た雄渾な悲劇性が感じられるとしたら、それは彼が不可避免的に悲劇を招き寄せるといって、一種の呪われた英雄だからであろう。

を下敷きしている、あるいは意識しているのは間違いない。それは、岩城校長が、道後温泉を通り過ぎるときに、漱石の『坊っちゃん』のようだと言及することからも明らかである。

『坊っちゃん』は、一人称の語り手が自らについて行う説明で開始される。そのときまっさきに語られるのは、主人公が無鉄砲な性格で、屋根から飛び降りてけがをしたり、ナイフで自分の手を切ったことがあるという経験である。これは堂島のけがと対応している。堂島もまた物語の前史として2度けがをしている。1度は、けがをするつもりがないのにしてしまった工場での経験であり、2度目は自ら左手を割れたビール瓶で傷つけた経験である。1度目のけがは、けがをすることを望んでしたけがではなく、2度目のけがは、けがをするためにしたけがである。

『坊っちゃん』の主人公は、兄からいくらかの金と引き替えに事実上縁を切られてしまった。学校を出たのち、仲がよい〈清〉とも離れて、四国へ来ようとしている。ほとんどなりゆき任せと言ってよいような旅立ちである。堂島もまた両親を失い、妹にも去られて、なりゆきで四国にやってくる。ふたりとも四国はどうかと校長や監督に言われてその気になったのだが、その実目的地がどのようなところか知りもしないし、関心もない。

ディテールに関して『アパッチ野球軍』と『坊っちゃん』には多くの共通点がある。『坊っちゃん』では主人公の布団にバツが入られるという嫌がらせがされるが、堂島は部屋にいるところにヘビを投げつけられる。そういう生徒たちの田舎者ぶりに堂島は啞然とするが、坊っちゃんも田舎者性を常に軽蔑している。『アパッチ野球軍』の「よろづ屋」は、その上昇志向や気取りにおいて『坊っちゃん』の赤シャツとうりふたつである。そして、赤シャツを助けるその弟は、『アパッチ野球軍』の中では「よろづ屋」の息子〈コウモリ〉として描かれることになるだろう。そして何より、不潔な現実に対して妥協なく戦いを挑む堂島は、〈坊っちゃん〉そっくりである。

ただし、決定的に異なるのは、『坊っちゃん』が結局は社会ないし他人と溶け合うことができない人間の、コミュニケーションの不可能性を描いていることである。『坊っちゃん』で暴力をふるうのは、彼が馬鹿にする田舎者たちで

はなく、彼自身である。また、他人をむやみと軽蔑するのも彼の特徴である。自らが旗本の家の出身であることを誇りとし、あえて他人と交わろうとしない姿勢は、地元に溶け込めないことを悩む堂島とは似ても似つかない。〈坊っちゃん〉が軽蔑しようがしまいが、漱石が描く松山の人々は文明化している。ただ、その文明の質が主人公とは異なるだけである。それを一刀両断にするのは、〈坊っちゃん〉の傲慢であろう。

基本的な構図において、『坊っちゃん』とは、そのような主人公が、結局新しい土地になじむこともできず東京に戻ったのち、他人とあまりかかわらなくてもすみ、機械を相手にしていればよい路面電車の技手となる話である（堂島が野球をやめたあとで工具をしていたことを思い出させる）。彼が心を許せるのは、擬似的な母親である〈清〉だけである。この物語がどうしても一般的には、若い正義感の痛快な暴れっぶりというふうには理解されるのかが、私にはまるでわからない。彼の暴力は、世界をまったく変えることができない。それは、現代において時折起きる、無視された者が思いがけずひどい暴力を爆発させる事件と、本質的には変わるところがない。〈坊っちゃん〉は言語によるコミュニケーションが決定的に苦手である。だから彼は、怒りを表明するのに鉄拳制裁をもってするしかない。それは、『アパッチ野球軍』では、いまだ社会化されていない野蛮な生徒たちのふるまい方である。すぐに「おい、やる気か」「殴り込みだ」と声を荒げる〈網走〉と同じである。

松山にすることができなかった〈坊っちゃん〉は、再び匿名性が濃い都市へ舞い戻り、田舎と軽蔑した松山でもらった額のほとんど半分に過ぎない給料で暮らすことになる。堂島は、辺境で野球を教えることを決意するが、〈坊っちゃん〉にとっての東京はもはや華やかな都会ではなく、辺境じみた、仕方なく身を置く場所であるはずだ。彼は逆向きに鳥流しにされていると言ってもよい。付け加えるなら、漱石が残した小説はこれに限らず、つまるところ他人がいかに自分にとってわからないものであるか、そして意思の疎通が難しいかを繰り返し述べたものである。

いずれにしろ明白なのは、堂島がこのような『坊っちゃん』の主人公のほとんど正反対の人間として描かれていることである。彼の孤独とは、〈坊っちゃん

ん)の孤独とは本質的に異なる。〈坊っちゃん〉の孤独とは、彼の性格から導き出された必然的なものであり、自明であり、運命であり、もしかしたら本人にとって意識されないものですらあるかもしれない。が、堂島の孤独とは、今理解者がいないこと、今仲間がいないことからくる、今における一時的な欠如にすぎない。〈坊っちゃん〉が絶対の孤独を生きる人間であるなら、堂島の孤独は相対的なものでしかない。もし、堂島が本物の孤独を感じたとしたら、それは、「理想だけでは生きていけない世の中の厳しさ」を知り、にもかかわらずその理想だけを相手にしようとした瞬間でしかあり得ない（だから、その彼に千恵子が与えられるのである）。

〈坊っちゃん〉には理想も使命感も欠けている。別の言い方をすれば、彼には人生を支えるべき物語が欠けている。その点では、彼はカミュが描いたムルソーのような人間なのである。堂島には少なくとも野球という物語があった。白いボールを媒介にして、夢を見ることができた。が、そのような夢は〈坊っちゃん〉には閉ざされている。

『坊っちゃん』の登場人物たちの多くは渾名で呼ばれるが、その渾名は、呼ばれる本人の性格や特徴から由来している点で、『アパッチ野球軍』における命名法と著しく異なっていることも指摘される必要がある。言うまでもなく、『坊っちゃん』で渾名を付けるのは「おれ」という一人称で表象される〈坊っちゃん〉である。彼が、〈清〉以外の人物を本名で呼びたがらないのは暗示的である。彼は渾名によって、ある人物の一面やイメージをクローズアップないしデフォルメする。そのことによって、その人物の多面性は抹殺されてしまう。〈坊っちゃん〉は世界を、このように自分が見たいように見た人間たちが登場する場として再構成しないと安心できないのである。そのように再構成された世界とは、非常に限られた可能性を持つだけの、貧しい世界と言うしかない。が、おそらく〈坊っちゃん〉にとって、一面的な理解を拒む豊穡な世界とは恐怖と不安の対象にほかなるまい。そしてそのような豊穡な世界は、彼のこぶしの一閃程度では、びくともしないものであろう。

舞台を瀬戸内海沿いと設定した学校の物語という点では、当然ながら壺井栄の『二十四の瞳』（1952年発表）も連想される。『アパッチ野球軍』『坊っちゃん』『二十四の瞳』の3つの作品において、その形に多少の違いはあれど、教師とは、文明の恵みをまだ十分に受けていない僻地に文明をもたらすものということになる。欲望と因習のままに生きる子供や大人を、より新しい自由で合理的な価値観の下で再編成することであろう（ただし、〈坊っちゃん〉にはその種の、ある意味では過剰な使命感や責任感はほとんどない。それが彼を不幸にしている理由のひとつである）。

『二十四の瞳』の主人公の大石先生が勤めることになった学校は、島の岬の先端にある。それは、猪猿村がそうであるように、他の町や村から遠く離れた空間である。特に教師が行きたがらない不便な場所である。

住まいから遠いので、大石先生は自転車通勤する。当時、その周辺では自転車は物珍しかった。そんな乗り物を使うハイカラな女性であるということから、岬の人々は敵意を抱く。この敵意の底には、自分がまだ浴さない文明のありがたみを享受している者への嫉妬があるだろう。また、自転車とは、自分の力でどこまでも遠くへ出かけることができる自由で解放された生き方の象徴でもある。その自由が、土地や貧しさに縛り付けられている村人たちの反感を買った理由でもあろう。やはり『アパッチ野球軍』において、馬車や自動車が特権的な、ただのモノではなく、象徴的な機能を担わされていたことを思い出させる。実際、大石先生は、自ら教師になろうと思ってなった人である。親に命じられて職を選んだり、あるいは当たり前のもので親の職業を継ぐ他の登場人物たちとは決定的に異なっている。だから、彼女は、戦時体制ゆえにもはや教育という仕事に希望が持てなくなったとき、その職を捨てることもできるのである。

『二十四の瞳』は案外陰惨な物語である。この中に登場する生徒たちの大半は貧しいが、一部には裕福な者もいる。ことに女生徒間の貧富の差は大きい。卒業後ある者は親に売られ、おそらくは娼婦に身を落とす一方で、ある者は裕

福な婦人として安楽な生活を楽しむ。そこに蔑みや羨望の視線が生じる。女性が不幸である根本的な原因として、社会が女性を不自由に制限していることが何度も指弾されている。他方男子生徒のほうは、戦場に駆り出されて戦死したり失明したりという別種の悲惨が見舞われる。

『二十四の瞳』にある種の強さが感じられるのは、作者が男女平等と反戦というふたつのしっかりした足場を持っているからである。すなわち、啓蒙的であるからである。そうした啓蒙性を持つ点でもこの作品は『アパッチ野球軍』と共通するが、異なるのは、堂島が常に強い指導者として、命令口調で生徒に相対するのとは対極的に、大石先生はむしろ生徒と同じ視線に立とうとすることである。

この小説の中で、大石先生は生徒たちが掘った穴に落ちてアキレス腱を切ってしまう。これが誰の処罰問題にもならないのは、現代の感覚からすれば実にはのんきと言うほかない。ただ、堂島や〈坊っちゃん〉のけがが、自らが作った、いわば主人公たちの本質が必然的に発生させた、人格の表現にほかならないのに比べれば、大石先生のけがは、単なる偶発的な災難や事故以上ではない。

この『二十四の瞳』以上に『アパッチ野球軍』に近いのは、むしろ学校物語ではない、大江健三郎『万延元年のフットボール』かもしれない。1967年から書き始められたこの小説は、やはり四国の山奥を舞台とする小説である。作家の故郷であるから、この場所が選ばれたのは奇異とするには当たるまいが、偶然にしては『アパッチ野球軍』の舞台と近すぎるようにも思える。

『万延元年』は、時代的には『アパッチ野球軍』とほぼ同時期に成立した作品である。あらすじを短くまとめることは、この饒舌な細部で溢れかえっている小説の表現力を大幅に減少させるようで気が進まないで、それは省略する。

どうにも疑いがないと思えるのは、安保闘争の直接的な影響下にあるこの大江の作品と同じ空気を『アパッチ野球軍』が感じさせることである。たぶん、それを1960年代の日本に漂っていた政治的な雰囲気と言い換えても誤りにはならないであろう。エネルギーや性が解放され、暴力や支配を否定し自由を求め

た闘争が敗北するという、希望や期待があると同時に失望感もあった時代、行き先がはっきりしているようで不安でもあった時代の作品なのであろう。安保闘争は『万延元年のフットボール』を生んだが、同時に『アパッチ野球軍』も生んだということである。物語の最後に理想が現実には負けたとつぶやく堂島の姿には、安保闘争で負けた若者の姿が影を落としていないはずがない。

大江健三郎の代表作とも呼ばれて賞賛されてきた『万延元年』は、現在書店で容易に目にするにはできない小説となってしまっている。『アパッチ野球軍』にしても同様である。結局、それは現代が1960年代から遠く離れてしまったということを示しているのかもしれない。半世紀に近い時間が流れたのであるから、それも不思議ではなからうか。

万延元年に人々が一揆を起こしたようなそのような力と自発性で、猪猿村のアパッチたちは自分たちの球団を作ろうとしたはずなのだが、その力と自発性もまた時代の向こうに消え去ったのであろうか。

参考文献

花登筐（作）、梅本さちお（画）『アパッチ野球軍』 少年画報社・オンデマンド出版（2005年）

同 DVD-BOX 東芝デジタルフロンティア（2002年）

夏目漱石『坊っちゃん』 新潮文庫（2012年）、角川文庫（2013年）

壺井栄『二十四の瞳』 角川文庫（2013年）

大江健三郎『万延元年のフットボール』 講談社文芸文庫（1988年）